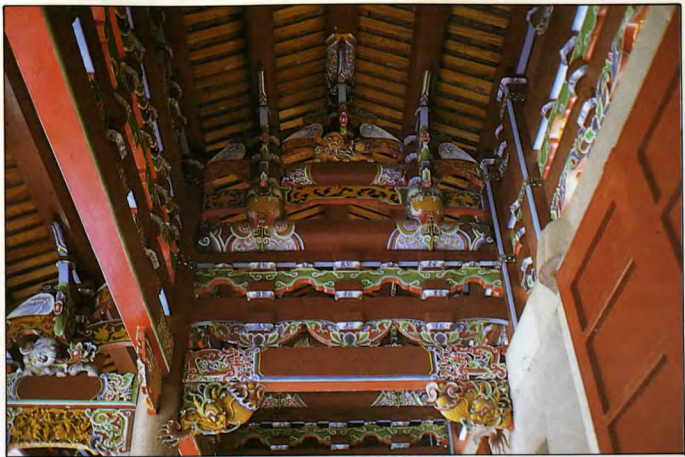


櫺星門の木造部分の構造には、数層の梁木を使用して、堅固に作られている。大梁の下には鯨の形をした雲板があり、また獅子と象の形をした彫刻もあり、屋根の重量の支えとなることを象徴している。



儀門は大成殿の前にあり、また大成門とも呼ばれる。平常は閉ざされており、祭典の時だけ開かれる。左には金声門、右には玉振門があり、平常はこれを使用している。



と受け継がれており、私たちが台北市孔子廟を参観するときにも、これを忘れてはならないのです。

二、台北孔子廟の建築美術

民国一六年（一九二七年）に孔子廟の再建が開始された当初は、周到に考慮された再建プランが建てられ、規模も将来を十分に考慮に入っていました。中央の線に並ぶ主要建築は、順に万仞宮牆・泮池・櫺星門・儀門・大成殿及び崇聖祠と続き、東側には東廡・東庫、西側には西廡・西庫となっています。左側の空き地は、前に明倫堂、後ろは朱子祠に予定され、朱子祠の階上は朱子と文昌帝君を奉り、階下は図書館と予定されていました。右側の空き地には武廟を建て、武門の神様関帝を奉り、後ろには奎（かい）楼が高くそびえて魁星を奉る計画です。この文と武、孔子と関帝の廟を並べて奉り、さらに朱子祠と道教的色彩濃い奎楼を併せて建てるのは、前例のあることでした。台南



儀門の屋根は入母屋式になっており、屋根にはいくつもの曲線が交錯して変化に富んだ線の美を作り上げている。



儀門は幅五間、前には廊があり柱は八角形の石柱、すっきりと長く簡潔で、列をなした様にはリズム感が溢れる。

孔子廟は、台湾でも最も古く規模も大きい孔子廟ですが、同じく明倫堂・朱子祠と魁星閣が含まれています。

残念なことに、これだけの計画も経費不足のために、左右に予定された四つの建物は建てられませんでした。王益順の手になる本来の設計図を見ると、南の万仞宮牆の外にさらに青雲牆と下馬碑が加わっていますが、これも実現しませんでした。

今、孔子廟を参観すると東側に空き地がありますが、これは当初明倫堂と朱子祠の為に用意されたものです。西側の空き地には、戦後明倫堂が建てられました。これは、コンクリートの現代建築で、現在集会用に使われています。

1. 費（こう）門・泮（はん）宮・万仞宮牆（しょう）・礼

門・義路・泮池

それでは、まず台北孔子廟の巋門・泮宮・万仞宮牆・礼門・義路・池等の建築から見て行きましょう。



儀門の木彫りの窓は螭龍団炉窓と言われており、図案は香炉のようにみえるが、内側から数えてみると八匹の龍から構成されているのが分かる。

黌門と泮宮は、孔子廟の左右の正門です。他の孔子廟によっては、これを牌坊（中国の伝統的な建物、孤立した鳥居のような門の形）や通常の門楼の様式で作るところもあります。台北孔子廟では西の黌門、東の泮宮共二重屋の門楼で、屋根の稜線の先端は燕尾と呼ばれる形式で跳ね上り、中央に門を開け、左右は円窓になっています。大龍街からその優美な外観をながめることができます。

ちょうど南に当たる酒泉街から、高く大きな照壁（寺や邸宅の門前に建てられる）が見えますが、これが孔子廟には欠かせない万仞宮牆です。名前の由来は論語の子貢の言葉にある「夫子（孔子）の牆は数仞（十メートルほど）もあって、その門から入れないと、立派宗廟の美も居並ぶ百官の様子も見られない。その門から入れた者は或いは少ないだろう」から来ており、孔子の学問の高さや深さを意味しています。学問には努力が必要で早道などなく、古代の学校の名称を取った門である黌門か泮宮から入って、心を落ちつけて励みさえすれば、奥を極めることができることを、建物の配置から象徴しています。

台北孔子廟では、外側に万仞宮牆と書かれており、内側には麒麟が

樞星門の屋根には麒麟が載せられており、彩色の瓦と灰色の壁土で作られている。



樞星門の屋根の角には小さな獅子が置かれている。一般にはこれは魔除けのためと言われるが、獅子もめでたい動物の一種である。



樞星門の石壁の人物彫刻である。蓮の花を手にとっており、屋根の支えを象徴している。台湾の寺廟建築の歴史を見ると、しばしば外国人が屋根を支える姿の影があるのに気づく。





樞星門の壁には交趾陶の裝飾が施されている。交趾陶は、低温で焼成される陶器の一種で、豊かな色彩が特徴である。人物、乗馬、建物などの形に焼いて、壁にはめ込まれている。題材は、中国古典の物語などから取材しており、奉納の芝居の意味を持たせている。

儀門の木造構造は、詳細に観察してみると左右が対称ではないことに気づくだろう。昔は、廟の建築には左右を分けて別の大工が競争で作ったためである。樹型の蟠龍の形も異なっている。



東廡の全景、東廡は西廡と共に、儒学の隆盛に貢献した歴代の賢人、儒者の位牌を奉つてある。



西廡の屋根から東廡を望む。東西廡の屋根は緩やかな線を描き、素朴な造形美をなしている。



描かれています。昔から徳のある獣とされた麒麟で、古くは万仞宮牆ばかりではなく、役所や寺社等の照壁にも麒麟がよく描かれており、その歴史の古さを思わせます。

賢門から入り、礼門をくぐると櫺星門や池にでます。礼門と義路は左右にある門で、孔子廟の中央にある主要建築に通ずる入り口ですが、その構造は簡単で、単純な門であるだけです。

泮池は、櫺星門の前、万仞宮牆の後ろにある半月形の池です。古くは、邸宅や寺廟の前には半月形の池を掘ったもので、防災や暑熱の調整の能の他に、地相の上から象徴的な意味も持っています。孔子廟の泮池は、こう言った意味だけではなく、泮宮の水、つまり学校付属の池と言った意義もあります。

台北孔子廟の泮池には、石造りの橋がかかっており、泮橋と呼ばれています。橋の面はアーチをなしており、欄干も石造りで竹の形をしています。橋の両端の欄干は、筆の形をした装飾を施され、優雅な美観を誇るだけではなく、文運と節操の高さを象徴していて、じっくり意味を味わう価値があるでしょう。

儀門の渡り廊の壁の交趾陶裝飾である。
花瓶をテーマとしているが、簡潔な構図
とすっきりした色彩が美しい。



泮池にかかる泮橋には、もう一つ面白い伝説があります。それによると、昔はその地方に科挙に合格し、最終試験の殿試に一等の状元を取った人出た場合には、孔子の生誕の祭典の時に泮橋を渡り、櫺星門と儀門を通って、まっすぐ大成殿に上がることができたと言うのです。しかし、地方によっては孔子廟に泮橋をかけていないところもあります。

2. 櫺(れい) 星門

泮池を通り、庭園を回れば櫺星門です。本来は、石畳と芝生しかなかったのですが、後になって庭園や花壇を造園したものです。

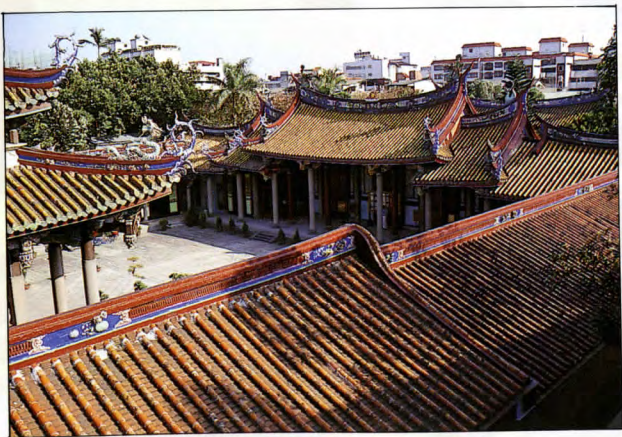
櫺星門は、孔子廟には無くてはならない建築物で、廟の前に建てられます。曲阜の孔子廟を例にとると、櫺星門は牌坊の形をしています。台湾では、彰化の孔子廟の櫺星門は屋根を持ち、門楼の形式を備えています。台北孔子廟の櫺星門は、幅が七間もあり、入母屋式二重屋根を採用しており、門とは言え御殿のような形をしていて、曲阜の孔子廟とは異なっています。



東廡の軒下の櫺型、福建南部の櫺型は蟠龍の形を好むが、流れるような曲線は装飾性豊かである。



西廡の室内の様子。天井組の材料など比較的簡素で、彫も少ない。厨子に収められているのは歴代の賢人、儒者の位牌である。



西廡から儀門及び大成殿の一角を望む。軒の線がぶつかりあつて、壮麗な美を作り上げる。

櫺星門の入り口中央には、精巧な一對の龍の石柱がありますが、この材料は泉州から購入したものです。二種類異なる色が見て取れますが、青緑の石は「青斗石」で、乳白色の石は「泉州白石」と呼ばれています。龍の石柱以外にも、壁には各種の花鳥図案の石の彫刻がありますが、簡潔なデザインで孔子廟の文雅の雰囲気を作り上げています。中国建築の門では一般の仏教寺院は四天王を、普通の廟では民間信仰により神荼と鬱壘等と門神を描きますが、孔子廟の櫺星門には門神を描きません。櫺星門の門板には百八の門釘が打たれています。これは、古い門の建築様式に則ったものです。詳細にみてみると、櫺星門と大成殿との木彫門のスタイルが違うことに気づくでしょう。櫺星門建築の時には、本来の設計担当の王益順は泉州で逝去しており、櫺星門は台湾の土工が後を受けて完成させたためです。

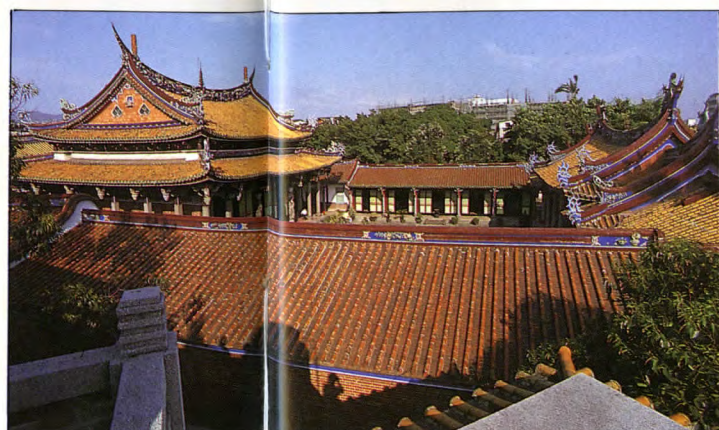
三、儀門

櫺星門を過ぎると、次は儀門です。儀門は大成門とも呼ばれますが、



大成殿の前面である。屋根の中央には七層の宝塔が置かれており、魔を鎮めると言われる。両端には通天筒が立っているが、これは経書を守ると伝えられる竹筒である。

大成殿の遠景。屋根根は入母屋式の二重屋根構造で、雄大な造形である。



孔子記念祭典の時、大成殿に三牲を供える。



大成殿は孔子廟の中心となる建物で、中には聖人孔子の位牌を奉っている。門の上に掛けられ額の書体も力がこもり雄渾である。

大成殿の軒の角柱のある所には、水平に水車埦（壁などの補強のため厚くした部分）が築かれ、ここに塑像などの装飾が施されている。埦には麒麟があり、屋根の稜線上には梟や鳥が飾られ、孔子の教育対象には制限がないと示している。



大成殿の斜めの棟には、水龍と巻草の装飾が施されているが、水龍は火の神祝融を抑えて、火災を防ぐと言われる。

大成殿の屋根の両端にはそれぞれ筒状の物が立っているが、これは通天柱或いは通天筒と呼ばれ、上には蟠龍、下には伝説の大亀が置かれている。これは孔子の徳の高さを記念して立てられるとともに、また秦の始皇帝の焚書坑儒の時に、書を隠すのに使われたので立てられるとも言われている。



これは大成殿に入る主となる門であることからきています。幅五間で、左右に別に入り口が作られています。これは曲阜の孔子廟と同じ形式です。左を金声門、右を玉振門といい、通常はここから出入りします。

儀門の廊の部分にも石柱が使われていますが、龍の彫刻はなく簡素です。その壁には交趾陶の装飾が施されていますが、色使いは上品で鑑賞価値の高いものです。最も重要な点は、中門の両脇にある木彫りの「螭龍団炉」と呼ばれる窓でしょう。螭（ち）龍とは龍の九匹の子供の一匹で、角がなく、伝統的に家具や建築の彫刻のテーマにされてきました。螭龍団炉とは、数匹の螭龍で香炉を形作る文様の一つですが、ここでは優美な流れるような線が一息に造形を構成しています。樞星門には八匹の龍で香炉を形作り、精緻な彫刻の傑作と言えます。

儀門の内側には、鏞（よう）鐘と晋鼓が置かれ、祭典の時に使われます。ここまできたら、上を見上げて屋根を支える梁と棟木の構造を眺めましょう。中国の古代建築には、しばしば露明造りと呼ばれ、天井板が張られておらず、直接梁等の構造がみと取れることがあります。



大成殿の屋根の中央には七層の宝塔が置かれていた。仏教寺院は舍利塔を建ててが、孔子廟の宝塔は、民間に伝えられてきた魔除け装飾の意味がある。



大成殿の月台の前には、御路がはめ込まれている。一名石階と呼ばれる御路は、斜めの坂から生まれ構造だが、極めて高貴な場所とされており、これを踏んではならない。これには雲龍の彫刻が精緻施されており、一方は珠をつかみ、もう一方は印を握り締め、天下を睥睨する様は、勇ましく勢いがある。

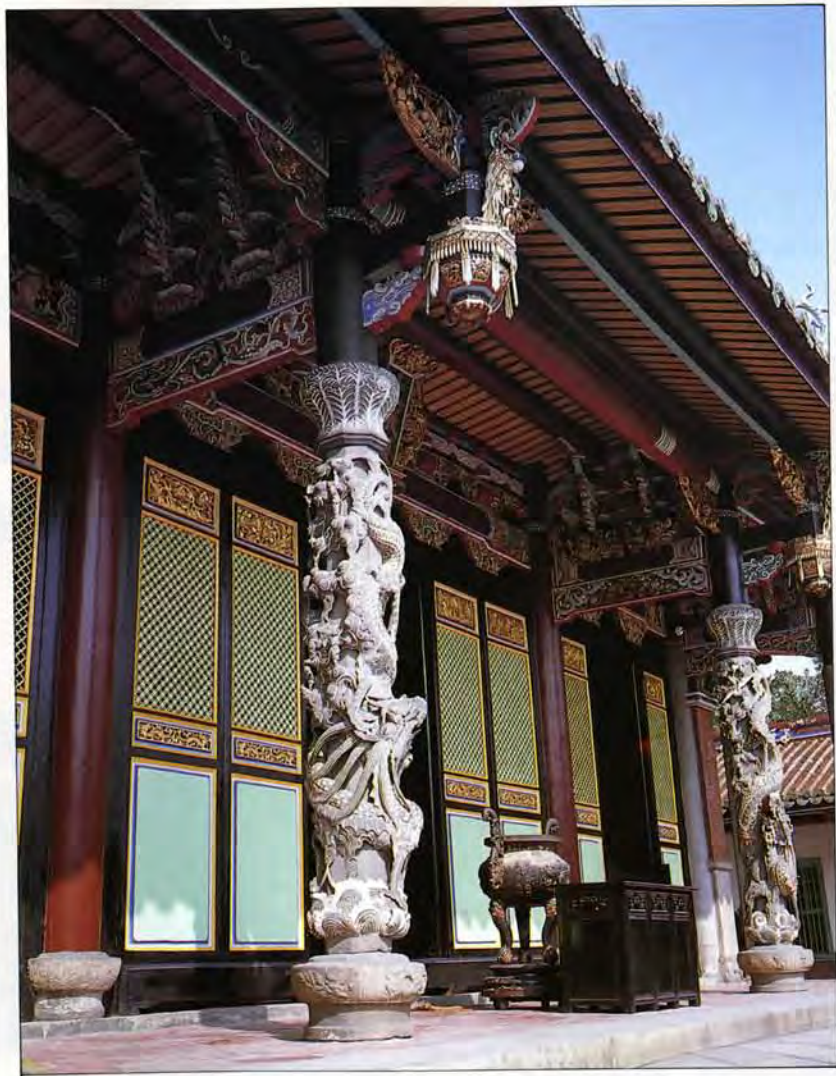


石彫りの御路は、龍の姿がうねり、頭を上げて勇壮な姿で、造形は力強い。



大成殿の基盤の台には五段の階がある。これは高貴な御殿にのみ付けられる。

大成殿前の龍の柱、洗練された手法と力強い造形が魅力である。



梁は建築の力学を満たしながら、彫刻も施されて、美的効果には「三通三瓜式」が採用されていますが、これは梁二本にそれを支える瓜柱三本が備わった形式で、瓜柱は瓜のような形をして鬚脚が梁をしつかりつかまえています。こう言った構造は、耐震性に優れており、地震の多い台湾に向いています。

儀門の梁構造には、もう一つ面白い特色があります。左右の細部の彫刻をよくみると、ずいぶん違っているのです。昔は、建築に際して二人の棟梁を雇って左右を受け持たせることがよくあり、基本設計は同じでも彫刻に技量を発揮して競争したものでした。一九三〇年に台北孔子廟の儀門を建てたときにも、設計者の王益順は二組の木彫り職人を招いて、左右に分けて発注したのです。現在、詳細に比較してみると、左右の相違がよく分かるはずです。

四、大成殿

儀門を過ぎると、大成殿が広々とした石畳の中央に建っているのが目に入るでしょう。孔子生誕の祭礼の時には、正献官・分献官及び陪

大成殿の基盤の台の前には月台が設けられている。これは、丹墀とも呼ばれているが、孔子廟には必ず作られるもので、祭典の際六佾の舞いはここで舞われる。





大成殿の構造は、梁や柱の上に多くの枅型を使用し、中央の藻井と周囲の鏡板を支えている。あらゆる部分がすべて嵌め込み式で接続され、釘は一本も使われていない。



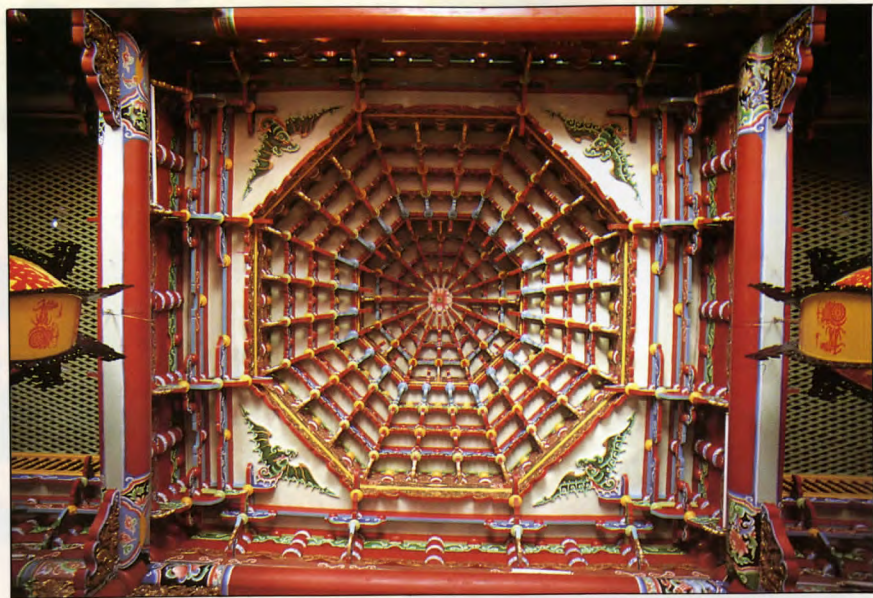
大成殿の透視図。ここから屋根の様式と内部の木造構造との関係が見て取れる。藻井を中心とし、天井の鏡板が四方を取り囲んでいる。

祭官等が古式に則ってこの花崗岩の石畳に並び、厳粛に儀式を執り行います。

大成殿は孔子廟の主建築で、聖人孔子の位牌を奉っています。建物は、基盤となる台にのっており、階段がつけられています。大成殿の前には、同じく台が設けられており、月台とも丹墀（ち）とも呼ばれています。孔子生誕の祭典の際には、楽器が揃えられ、六佾（いつ）の舞いが奉納されます。古式に則れば、八佾の舞い計六十四人となるはずなのですが、台北孔子廟では丹墀の面積が限られているため、六佾三六人の舞いを行うに止めています。丹墀の前にある御路には、雲龍彫刻が施されており、その勇壮な装飾は高度な芸術的水準を保っています。

大成殿は幅五間、奥行きは六間で、合計して四二本の柱を使用しています。屋根は入母屋式の二重屋根で、周囲に回廊を設けています。その形式は雄大かつ厳粛で、台湾では有数の建築と言えます。

大成殿の廊には泉州の白石を使用した柱が使われ、中央の柱には蟠（は）龍の彫刻が施されています。これらの彫刻は、泉州惠安一帯の



大成殿内の八角形の藻井には、二四の枋型がそれぞれ延びてきて層をなし、中央の一番高いところに達している。見たところ蜘蛛の巣に似ているというので、宮大工たちはこれを蜘蛛の巣の意味で「結網」と呼んでいる。四隅に蝙蝠は、「賜福」つまり福に恵まれるという意味が込められている。



大成殿内部には、太い柱が林立し、巧みな構造を特った枋型が支えとなり、荘厳で厳肅な雰囲気を出している。

職人の手になるもので、古拙な技法を保持して、通常の寺や廟の煩雑な装飾とは一線を画しています。

頭をあげて大成殿の屋根を眺めてみましょう。屋根の中央に七層の小さな塔が建っているのが見え、屋根の稜線が軒にきて燕の尾のように跳ね上がっている所、この形を燕尾と言います、その両端に筒状のものが置かれており、また数十羽の鳥や梟の塑像も見えるはずです。これらの装飾には、物語や伝説が込められています。

屋根の小塔ですが、塔はもとインド仏教から伝わり、中国に入ってから中国建築に変わって行きました。民間信仰では、塔は魔除の象徴とされ、大成殿に置かれるようになったのです。筒状のものは通天柱と呼ばれ、大亀の上に立っており、筒には龍がついています。これは宋朝の聖人朱子が孔子の徳の高さに感じ入って、泉州の孔子廟の屋根に立てて尊敬の念を表したのに始まると言い、福建省南部の孔子廟の伝統になったのだそうです。もう一つの説は、秦の始皇帝の焚書坑儒の時に、学者は経書の保存のために竹筒の中に隠したところから、後世これを記念して屋根に通天筒を立てるようになったと言うもので

大成殿の厨子には、聖人孔子の位牌が奉られている。



大成殿の水車埭には、多くの忠節を守った物語を題材とした交趾陶の装飾がされ、人物の姿は生き生きと動きだしそうであり、背景の山水と共に職人のすぐれた手腕を見せている。



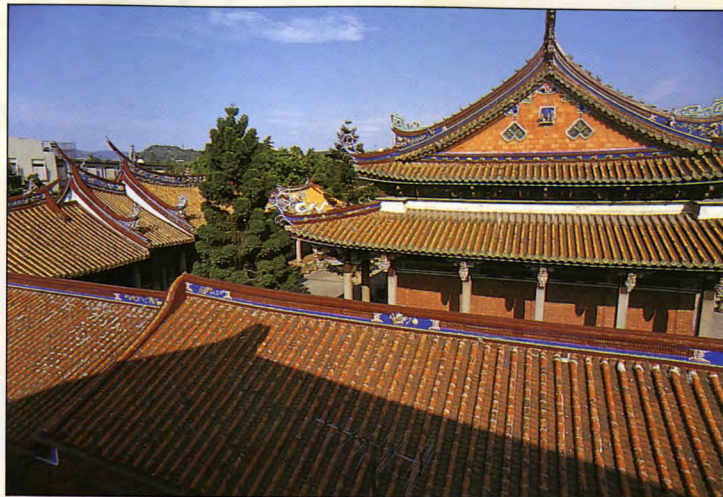
す。

大成殿に入ると、中央の厨子に聖人子の位牌が奉っており、上には高く先の総統蔣介石先生の筆になる「有教無類」の金文字の額がかかっています。左右の壁には四配（顔子、曾子、子思、孟子の四人）や十二哲人などの位牌が並んでいます。大成殿の中は荘厳で身の引き締まるような厳粛な雰囲気漂っています。天井には八角形の装飾である藻井がはめ込まれ、二十四本の柱の上部の枅形が中央に向かって伸びていき、中央に近くなると十六に減って、頂きで一つに集束します。放射状の形は、状麗なものです。藻井の四隅には四匹の琿モリの装飾が彫られています。四匹の琿モリは中国語で「福を賜う」という言葉と同じ発音になります。

また、藻井の両脇には斜めに連子の鏡板がはめ込まれ、屋根の桁や梁などを隠していると共に、天井の通風にも役だっており、装飾と実用をかねた中国の古い建築物の知恵には、感心させられます。

5. 東廡西廡(ふ)

大成殿の側面である。屋根の下の山形の壁面には碧の形をした緑の釉薬をかけた通気窓が開けられている。



崇聖祠大成殿の後ろに控え、孔子廟の後殿となっている。孔子の祖先五代を奉っている。清代雍正帝の初年に、孔子の祖先五代に位を授け、崇聖祠に奉るようになった。台湾各地の孔子廟には、いづれも崇聖祠が設けられている。



大成殿と儀門、それに東西の廡とが一緒になって合院（中国の伝統的な中庭を囲む建築様式）を構成し、これが孔子廟の中心部分となっています。東西の廡は昔の住宅の護房或いは廂房（中庭の東西の建物で寢室などに使われた）に当ります。屋根は比較的低く、中の厨子には孔子の傑出した弟子たち、それに儒教の普及に貢献した歴代の儒者や賢人など合せて百五十四人が奉られています。

東西の廡は対称をなし、屋根の構造が簡素なため、室内の梁の彫刻も簡単になっています。外の廊の柱は一列に連なっており、それがはっきりしたりズム感を与えています。これらの石柱にはいかなる文字も刻まれてはいません。これは孔子廟の決りで、孔子の前で文章を弄ないということから来ています。柱の枋型には墀龍の図案が施され、その生き生きした造形は中国南方を感じさせます。

6. 崇聖祠

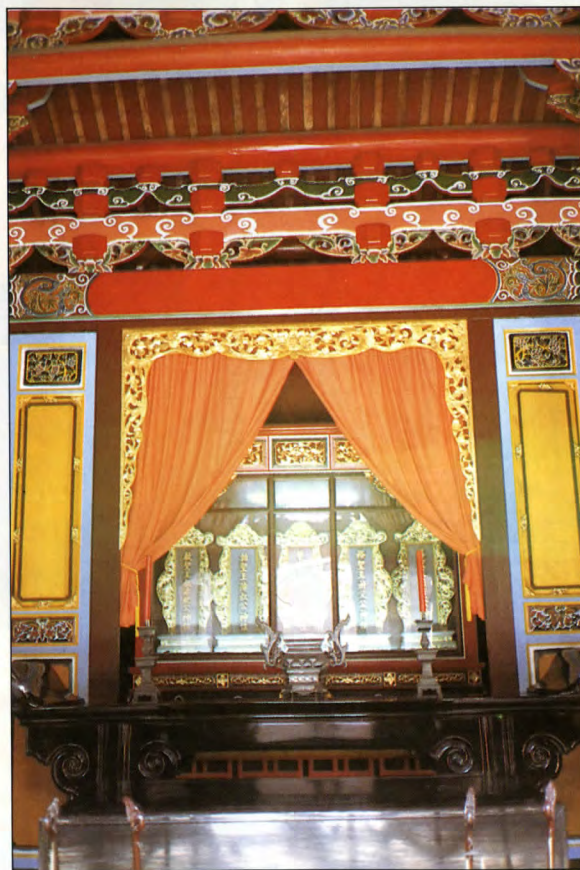
最後に、私たちは大成殿を回って、後ろの崇聖祠に行き着きます。

崇聖祠は、鮒子の先祖五代を奉った殿堂で、それには詒聖王木金父公、

崇聖祠の殿内の木造構造は、三本の梁に五本の瓜柱と呼ばれる側柱からなっているが、この瓜柱から長く鬚状の装飾が大梁を囲んでいる。上部には獅子の彫刻が飾られており、この建物の屋部は、建築の力学構造と装飾との両方の機能を兼ね備えている。



崇聖祠内部の厨子には、聖人孔子の祖先五代の位牌が奉られている。



裕聖王祈父公、詒聖王防叔公、昌聖王伯夏公それに啓聖王叔梁公などが含まれています。そのほか、孔子の兄や四配の父、それに儒教の聖人の父などが合せて奉られています。崇聖祠は、儒教の聖人や賢人の父の世代の人々の位牌を奉つてあると言えます。こういった祠があるのも、中国の数千年來続いた宗族の倫理制度と関係があり、孔子廟全体の配置にも、家のお霊屋或いは一族の祠などとあい通じるものがあります。

崇聖祠幅五間、東の翼には礼器庫が、西の翼には楽器庫があります。

この二つの庫は孔子廟にはなくてはならない設備です。崇聖祠の内部構造は、儀門と同じく露明造りで、梁と瓜柱の彫刻を見ることがができます。その屋根組には「三通五瓜式」が採用され、三本の梁に五の短い支柱がついています。瓜柱は金瓜或いは木瓜の形で、丸みのある造形は力の美を表現しています。最上部にある獅子座は、屋根全部の重量を支える勢いがあります。

三、台北孔子廟の礼器と楽器



孔子を奉る祭典用の楽器―祝、
形は四角く上が広く下はすば
まっており、木槌で叩いて音
を出す。



孔子廟は、一般の仏教寺院や民間信仰の廟とは異なり、多くの神像や仏像を奉ってはいません。孔子自身も、怪力乱神を語らずと言われているくらいですから、孔子廟の内部には字を書いた位牌を奉るだけです。孔子廟が静粛で荘厳な印象を与えるのも、中国の儒教文化の正統性を重んじる精神から来ています。孔子廟には多くの神像や祭具が置かれているわけではありませんが、古式に則って製作された礼器と楽器は少なくありません。毎年九月二八日の孔子生誕の祭典にはこれらが使用されます。

儀門に置かれる鑪鼓と晋鼓、大成殿前の丹墀に置かれる編鐘、編磬と特鐘、特磬とは、それぞれ異なる音色を響かせます。大成殿の前には、また祝（しゆく）、敢（ぎよ）、琴、瑟（しつ）、搏拊（はくふ）、鼗鼓（とうこ）及び塤（けん）などの古い楽器が並びます。祝は箱型の楽器で形は四角く上が広く下はすばまっており、叩いて音を出します。敢は木彫りで作られ、形は伏した虎に似ていますが、背中に凹凸の齟齬があり、これをこすって音を出します。搏拊は小型の鼓で、手で叩き拍子を取ります。鼗鼓も一種の鼓で、下に把手があつてゆすると、両脇のふりがぶつかって音が出ます。塤は、上が尖ってそこが